第３図　環状の貝製品（scale＝２／３）

写真４　環状の貝製品

正面左上部を観察すると、表面は発掘以前からの古い剥離のようであり、側面には平滑化された部分が僅かながら残っている。このことから、当初から丸みを持った台形状の外形であった可能性とともに、本来は正円に近い外形であったものが使用時において破損し、側面を修復した結果、穿孔部分の長軸とはずれた外形となった可能性も考えられる。

最大厚の数値（0.5cm）は表面・裏面ともに剥離していない部分であり、実際の貝の厚さを表している。なお、明らかに欠損していると判断できる部分が表面の下部と裏面の左半分に見られ、実測図では白抜きで表現した。

材質は製品であるために、種の特定は難しい。しかし、西本豊弘氏の鑑定によると、房総半島以南に分布するとされるイタボガキ科イタボガキ（*Ostra denselamellosa* Lischke）の可能性が高いといい、これは北海道に自然分布しない貝だけに興味深い。

考察

今回紹介した環状の貝製品は北海道内では他に類例のないものである。しかし、材質は異なるが同様の形態を持つものとして、続縄文時代のいわゆる「環」・「環石」・「環状装飾品」と呼ばれるものが挙げられる（第４図・第５図）。材質は主に白色系の石（滑石、珪質頁岩、珪藻質シルト岩等と記載）である場合が多く、その他に琥珀や翡翠、蛇紋岩製のものが存在する。

環状装飾品の大きさは広田良成の集成（広田 2003）によると、長径が 1.4～6.2cm、孔径が 0.25～1.8cm、厚さが 0.2～0.6cm の範囲内にある。長径が 2 cm 未満の小型のものもあるが、主体は 3.0～5.0cm といえる。また、形態は正円形のものと隅丸方形及び楕円形のものがある。正円形のものの材質は白色系の石以外の場合が多いという傾向がみられることから、形態及び材質により今後分類が可能かもしれない。

さて、環状の貝製品は、上記の環状装飾品（石製品）と比較すると、平均を上回る大きさであるが、斜里町尾河台地遺跡 13 号墓出土品（第４図 15、長径 5.9×短径 4.62×厚さ 0.7、孔径 0.58cm）とほぼ同規模である。形態は穿孔部分が楕円形である点とそれにともなって長径が大きくなる点が